

MfG_J_Yuukyuzan_steles_monuments

悠久山の石碑、モニュメント

序

参考 MfG_J_Reishuukai_TamuraBunshirou_TakahashiSuisonの序

参考 MfG_J_Yuukyuzan_Topicsの序（蒼紫神社と悠久山）

1. 令終会と悠久山公園

(1) 公園と令終会について

(2) もうひとつの悠久山について ～ 悠久山堅正寺

2. 堅正寺境内の新しい二体の銅像と碑文

(1) 設置の経緯

顕彰乃碑の全文

(2) 田村文四郎像、山田又七像の製作時期について

3. 拝殿脇の西脇順三郎撰文の蒼紫神社碑

4. (1) 山本帯刀

4 (2) 三島億二郎の碑の碑文

4. (3) 長岡藩総督河井君碑 顕彰碑

5. 星野嘉保子碑の碑文

6. 鵜殿団次郎の石碑

7. 小林虎三郎の碑

8. 福島甲子三 悠久山 石碑

9. 悠久山 県社蒼紫神社 灯籠風の石碑（娛寿会の碑 ほか）

10. 補足 石黒忠恵子爵

参考 令終会に関する文書

MfG_J_Reishuukai_TamuraBunshirou_TakahashiSuison

令終会、田村文四郎と高橋翠村

本文書MfG_J_Yuukyuzan_steles_monuments は、

最初に様製した MfG_J_Yuukyuzan_Topicsの追加版です

尚、「悠久山公園100歳」という冊子が、リバーバンクRIIレポート 2019 冬号として発刊されています。全60ページが悠久山公園100年の特集で、今では知ることが困難な、公園の歴史を知ることができます。

悠久山は、長岡駅の東、2.5キロに位置する、蒼紫神社を中心とする自然公園です。町なかから近く、市民にとっては当たり前にある公園ですが、よそから来られる方には、うらやましく思われる、自然のなかの、歴史、文化の香り高い公園です。

蒼紫神社参道脇、公園内には、幕末から明治・大正・昭和の長岡人の多くの石碑があります。江戸期の初期から後期、幕末、明治維新から大正、昭和の大戦まで、多くの歴史とトピックスをもつ場所です。付近の栖吉は、さらに古く、中世から戦国時代以来の歴史があります。

参考 MfG_J_Reishuukai_TamuraBunshirou_TakahashiSuisonの目次

令終会、田村文四郎と高橋翠村

2019年は、悠久山公園100歳記念の年でした。令終会設立の中心となった山田又七、田村文四郎二人の胸像も、堅正寺近くに建立され、お山に意義深い名所が、増えました。

山田又七については、別に「山口権三郎、山田又七」のガイド説明を作成していますので、ここでは、田村文四郎と高橋翠村について、ガイド説明をまとめました。

1. 田村文四郎と北越製紙

- (1) 田村屋から田村商店へ
- (2) 6代目田村文四郎
- (3) 田村文吉
- (4) 北越コーポレーション株式会社

2. 高橋翠村

- (1) 明治から大正期に新潟県の中越で活動した漢学者、教育家、書家
- (2) 藩の馬政に関わる長沢家の生まれ
- (3) 養嗣子となって高橋姓
- (4) 小林虎三郎の再評価に貢献
- (5) 星野保子像刻文撰者

3. 悠久と至誠

- (1) 中庸にある「至誠」と、蒼紫神社によせた忠精公の言葉
- (2) 山本五十六記念館にある「至誠」

令終会の命名 高橋翠村

会津八一の年譜ノートに「一八九五(明治二十八年)年、新潟中臈一年級に入学す。習字は高橋翠トンに学ぶ」とある。のように、会津八一の書の先生として知られている。

参考 解説抜粋

中庸章句第二十五章

高橋翠村について(まちづくり市民研究所 第2期 報告書)(2015)

高橋翠村2_長岡アーカイブ14号 連載 長岡の碩学(14)(2017)

そのほか、妻有の人物史 I (平成二年 十日町市博物館)

参考 MfG_J_Yuukyuzan_Topics の目次

1. 拝殿脇の西脇順三郎撰文の蒼紫神社碑
2. 堅正寺境内の新しい二体の銅像と碑文
 - (1) 中庸にある「至誠」
 - (2) 蒼紫神社によせた、忠精公の言葉
 - (3) 山本五十六記念館にある「至誠」
 『中庸』第二十五節 全文
3. 新しい令終会碑「記憶之園」碑と、その心
 - (1) 堅正寺脇の碑と碑文
 - (2) 作像者について

参考 令終会に関する文書

MfG_J_Reishuukai_TamuraBunshirou_TakahashiSuison
 令終会、田村文四郎と高橋翠村

悠久山は、長岡駅の東、2.5キロに位置する、蒼紫神社を中心とする自然公園です。

町なかから近く、市民にとっては当たり前にある公園ですが、よそから来られる方には、うらやましく思われる、自然のなかの、歴史、文化の香り高い公園です。

蒼紫神社参道脇、公園内には、幕末から明治・大正・昭和の長岡人の多くの石碑があります。

江戸期の初期から後期、幕末、明治維新から大正、昭和の大戦まで、多くの歴史とトピックスをもつ場所です。付近の栖吉は、さらに古く、中世から戦国時代以来の歴史があります。

1. 令終会と悠久山公園

(1) 公園と令終会について

星野嘉保子の碑、
三島億次郎の碑、
鵜殿団次郎の碑への
道を朱の線で示します。

1923年(大正12年)、悠久山公園に
銅像と記念碑が建立。
(写真は、戦時金属供出前の銅像、
長岡市政100周年 eライブラリより)



湯元館側の道路から、
細丸太の階段の道を
登る。

この道の先は、だいたい道
なりですが、分岐があり、
一本道ではありません。
湯元館側から入ったほうが、
わかりやすいように思います。

令終会之碑
長岡市長 日浦清三郎書

令終会の碑文

大正のはじめ
よわい六十をこえた市民が有志を
つのり令終会を結成した

その趣意書に曰く
「終わりを全うせしむるに
自己の私財を善用し
末を誤るなかれ」と

偉大な先人たちは
郷土を思う燃えた魂の結合で
地方文化の向上に力を尽くそうと
浄財を募り
悠久山公園の建設と道路の開
削に人々の幸を期した

われら後進
その倖徳を偲ぶ
こ々に令終会の碑を建て

平成二年十月吉日
長岡東 ロータリークラブ

田村文四郎翁 令終會の記

一、発端

然るに不幸大正六年十二月升一日、山田又七氏卒如として長逝されたので福島甲子三氏、補欠として監事に押され、・・・

かくの如くにして令終會は生れたのであるが、翌年すなはち大正六年はわが長岡市開府三百年に該るので、わが令終合は記念事業として悠久山及其の道路の修築、市の遊閑地公園の設備を企て一般公衆の便を計る事にしたのであつた。

これによつて見ると令終會、會の機構は長岡市内で齡ひ六十、耳順を超えた老人達ちの集りでその目的とするところは、長岡市開府三百年を記念するため藩祖々廟の所在地悠久山を、公園化するにあつた事が知らる。その生誕は大正五年九月、河島良温市長の時代で、名替賛助員には旧藩主子鬱牧野忠篤、長岡市長河島良温の両氏が推され、幹事には山田又七(山田氏歿後福島甲子三氏補欠就任)、渡邊六松、鷺尾庄八、佐藤孫次郎、田村文四郎の五氏が任せられたのである。命名令終合の令終二字の出所、典故、典拠につき命名者高橋翠村先生に就いて聞くに

高橋翠村老先生曰く 令終二文字の出典は、詩經大雅の既醉の篇からだ。既醉の詩は組先の祭をして主人が来賓を宴したる時、来賓が主人の厚意を諒し、詩を賦して主人の幸福を祝したる詩で八尊から成つてゐる。その第三章に云はく昭明有融、高朗令終、令終有俶、公戸嘉告、すと。句意は、主人の徳てり輝きてひかりあり、高く明かにして既にその始を善くした必ずその終をも善くせんと祭主の祝史が、この言を告げたといふにある。わが長岡市の富商が初め石油で産業を起し、今は既に老いた。神仏にても奉祀して貯へたる金を終わりをかざるために善用し末路を誤る勿れとの意を表したのであつた。果し同会員は皆な六十歳以上で事莫に成功せる老人ばかりである。

二、趣旨

令終會趣旨

大正丙辰秋九月同志相謀リテ令終會ヲ組織セントスルニ當リ聊カ其志ヲ述ベテ以テ大方諸賢ノ賛同ヲ請ハント欲ス

吾曹齡六十ヲ過ギ今將ニ老境ニ入ラントス一身一家ノ計ハ未ダ富メリト謂フ能ハザルモ幸ニ衣食ノ乏シキテ憂ヘズ惟フニ是レ聖代ノ餘澤ト郷當先輩ノ扶掖ニ依るモノニシテ日夕感謝措ク能ハザル所ナリ而モ・・・

悠久山公園100歳 記念プロジェクト実行委員会 「悠久山フォーラム」(2019)より
一部、テキスト化

(2) もうひとつの悠久山について ～ 悠久山堅正寺

悠久山には、もうひとつの悠久山の名がついた場所があります。以下は、悠久山堅正寺の初代住職の橋本禅巖住職と、曹洞宗の元管主であって近代曹洞宗の学林を創設したことでも知られる高僧、新井石禅師とのご縁の話です。

～ 橋本禅巖住職と新井石禅師との出逢いに想うこと
曹洞宗の寺院に、大雄山最乗寺という大寺院があるそうです。神奈川県南足柄市大雄町にあり、道了尊の名で親しまれ、境内は樹齢500年以上という杉の美林2万本がある。曹洞宗では北陸永平寺、鶴見の総持寺に次ぐ大寺院とのこと。
ここで、橋本禅巖住職は、新井石禅師と出逢った。
堅正寺初代橋本禅巖住職は、最乗寺におられた新井石禅師に師事、石禅師の総持寺入山に付き添って総持寺でも師事。
石禅師が総持寺管主を経て示寂の後、禅巖師は総持寺を去り、魚沼の雲洞庵に禅道場の指導者として入山し、さらに研鑽につとめた。
ちなみに、雲洞庵は若い時に新井石禅師が方丈をされた地。
そのことがあって、禅巖師は、生涯の師・石禅師との別れの後の学びの場として雲洞庵を選ばれたのだと思う。
そのとき雲洞庵に、二代駒形宇太七が新たに造成中の禅道場の教師を探しに訪れ、そこで禅巖師を紹介され、方丈として迎えた。
禅道場は、堅正寺とし、山号を悠久山と名づけられた。

これらの、いくつかの出逢いがなければ、その後の駒形十吉さんの活躍も、違ったものになったでしょう。数々の五十六語録も残らなかったかも知れないと思うと、なんという、ご縁でしょうか。

2. 堅正寺境内の新しい二体の銅像と碑文

(1) 設置の経緯

田村文四郎像は、北越コーポレーションにある武石弘三郎作を、3D計測機で精密に測定し、一緒に設置される田中後次作の山田又七像の大きさと合うよう、弘三郎作の縮小像として製作するとのことでした。

当初、公園内に設置を市に提案しましたが、公園内に像は不可とのこと、やむなく、公園外の堅正寺境内内の土地に、なったとのことでした。

(長岡歯車研究所・内山弘氏談)

中央の「顕彰碑」



山田又七像

田村文四郎像



顕彰乃碑の全文

歴史の水脈に風土は潤い
瑞々しき大地に文化は根を張る

私たちはたどるべき水脈を持っている
悠久の丘に公園を築き集う道を整えたのは
この地に生まれこの地を愛した人々だった
「令終会」の名のもとに集まった経済人たちは
はるか信濃川に至る長岡の街を見晴るかすこの丘を
人々が自然とふれあい心身を育む場にしようと
自ら動き私財を投じ想いを形にした
その願いはかない悠久山は
市民の心のよりどころとして今に至る

自立の気概と それを担う人づくりは
長岡精神の根幹だ

公園開設百年の節目に当たり
私たちは先人への限りない敬意を込めて
「記憶之園」を築き人と時代を繋ぎ
故郷を潤す水脈を絶やさぬことを誓う

令和元年十月二十二日

悠久山公園百歳記念プロジェクト実行委員会

(2) 田村文四郎像、山田又七像の製作時期について

田村文四郎像、山田又七像

山田又七像のほうが、早く製作されている。

田中後次、武石弘三郎のふたりは、1908年の頃、出張、留学中で、ともにヨーロッパにいた。

武石弘三郎

1901年(明治34年) 彫塑科卒業。その後、ベルギーに8年間滞
在し、その間にブリュセル国立美術学校に学んだ。

1909年(明治42年)帰国。同郷の石黒忠憲の知遇を得、その
関係で松本順・石黒忠憲(ただのり 陸軍軍医)像や
森鷗外像の制作を手がけた。

1919年(田村文四郎像の製作は、その後。

1920年(大正9年) 山田又七像を製作

1920年(大正9年) 石黒忠憲像を製作

1926年(大正15年) 竹山屯像を製作

1926年(大正15年) 今井藤七像を製作(北海道の老舗百貨店
丸井今井の創業者、三条出身)

田中後次(ノチジ)

1890年(明治23年) 鑄金科卒業

1899年(明治32年) 美校助教授時代に、山田又七像を製作

1908年(明治41年) 欧米に出張

(3) 山田 又七、田村文四郎と令終会

山田 又七(やまだ またしち、安政2年8月15日(1855年9月25日) - 大正6年(1917年)12月31日)は、明治・大正時代の起業家・実業家・政治家。宝田石油の創業者。新潟県出身。

長岡、宝田石油 山田又七

新潟大学工学部の前身となった長岡高等工業学校の設立を要請しつづけたのは、長岡市のテクノポリス構想の源流として記事にする価値は十分あると思います。山田 又七(安政2年8月15日(1855年9月25日) - 大正6年(1917年)12月31日)は、明治・大正時代の起業家・実業家・政治家。宝田石油の創業者。新潟県出身。

越後国三島郡荒巻村(新潟県長岡市)の農家に生まれる。1862年(文久2年)、家に入った強盗に右手の親指・人差し指を切りつけられ、指先が曲がってしまい、農家をあきらめ商人を目指す。1865年(慶応元年)、長岡町の小間物商・竹屋(加藤竹吉商店)に奉公するようになり、後にその養子となるが、1879年(明治12年)に養家を離れ、古志郡浦瀬村で水力による綿糸の紡績工場を営む。1887年(明治20年)、長岡の東部に連なる東山連峰に石油が出る事を伝え聞いていた又七は、新町の精油業者と共に浦瀬村を訪れ露出する石油が良質である事を確認し、その事業化に乗り出した。1890年(明治23年)、同時期に東山油田に目をつけ試掘を行っていた小坂松五郎が、資本の有利から一足先に事業化を果たしたものの、又七も殖栗順平らと山本油坑会社を興した。その直後に長岡石油会社、さらに1891年(明治24年)に高津谷石油会社、地獄谷石油会社、1892年(明治25年)には小坂松五郎らと長岡鉄管株式会社を設立した。

そして、松田周平から譲り受けた古志郡荷頃村比礼の鉦区を基に、1893年(明治26年)2月に宝田石油株式会社を創設。本社を長岡に置き、又七は社長に就任した。1896年(明治29年)には古志石油と合併し、古志宝田石油株式会社と社名を変更したが、1899年(明治32年)には宝田石油株式会社に復した。また、1898年(明治31年)には製油所を買収して、製油事業にも進出した。

明治30年代初めの石油鉦業界は、投機的な零細企業が乱立する一方、アメリカのスタンダード石油などの外資系企業が影響力を拡大していた。そのため、1901年(明治34年)、遊説のために長岡を訪れた大隈重信は、石油業者たちを前に石油会社の合同を提唱した。この提唱に応じて又七は、中小の石油会社を合併・買収し、1908年(明治41年)までの7年間に4次にわたる大合同を断行した。これによって宝田石油は、日本石油と並ぶ大石油会社に成長した。その一方で、無理がたたって会社の経営は悪化し、役員の大規模な交替による紛争、不祥事が絶えなかった。

この間、又七は1906年(明治39年)には新潟県会議員、1908年(明治41年)からは衆議院議員となり、1911年(明治44年)に緑綬褒章を授与されたが、会社内での実権を徐々に失い、1915年(大正4年)に社長の座を橋本圭三郎に譲った。なお、1921年(大正10年)、橋本らによって宝田石油は日本石油と合併している。一線を退いた又七は、田村文四郎らと令終会を設立し、悠久山公園の整備に着手したが、その完成を見ずに急死した。

長男・山田又司は慶應義塾大学を卒業後、銅山経営に従事し、1924年(大正13年)から衆議院議員を5期務めた。養子・山田多計治は大阪機械製作所(現・オーエム製作所)を設立し、その社長となった。尾形乾山の研究者としても知られる。

山田又七、田村文四郎と令終会

<https://www.nagaokacci.or.jp/file/pdf/about/guidebook/8p.pdf>

大正 5年(1916)、牧野家による長岡開府300年の記念すべき年を翌年に控えた中で、山田又七、田村文四郎ら当時の60歳を超えた人々が相集い「令終会」を結成しました。「令終」とは「人生の終わりを全うする」の意味で、彼らは「我々はやがて死を迎えるであろうが、生れ育った長岡の次なる世代のために、何か役立つものを残そうではないか」と考えました。そこで計画して建設され、やがて長岡市に寄贈されたのが自然豊かな美しい悠久山公園でした。令終会は募金趣意書に「人生の終わりを全うせしむるに自己の私財を善用し、末を誤ることなかれ」と訴え、当時のお金で10万円の寄付を集めました。現在のお金に換算すれば数十億円、その金額は令終会の発案がいかにより多くの市民の共感を呼び賛同を得たかを物語っています。平成8年に開園した「雪国植物園」も令終会思想に影響を受け、啓発されたことによりその設立構想が提起されました。そして、その思想に敬意を払いつつ、雪国植物園の造成維持運営組織の名称は「社団法人 平成令終会」と命名されました。信濃川をはさんで東5キロの地点に悠久山公園があり、西5キロの地点に雪国植物園があります。市民参加型で誕生した両施設が東西等距離に立地していることは不思議な一致ですが、それを可能としたのは、令終会思想をはじめとした先人たちの尊い理念が多くの長岡市民の心の奥に宿り、共感を与え続けているからなのでしょう。

田村文吉と令終会 (田村文四郎の三男)

田村文吉の悠久山学園都市構想・・・令終会の思いか
大正の初期 大正 5年(1916)、令終会(60歳以上の篤志家)が荒廃した悠久山を整備し、長岡市に寄付。

田村 文吉(たむら ぶんきち、1886年9月22日 - 1963年6月26日)は、日本の政治家、実業家。大正 5年(1916)は、文吉30才。参議院議員(1期)、第8代長岡市長。長岡市名誉市民。

新潟県長岡市の紙問屋・田村文四郎の三男として生まれる。新潟県立長岡中学校を経て、1911年に東京高等商業学校(一橋大学の前身)専攻科を卒業、越後鉄道に入社し、経理課長として実務経験を積む。1915年、父たちが設立した北越製紙(現・北越紀州製紙)に支配人として入社し、1934年に専務、1940年には社長に就任。工場の新設・拡充をリードし、北越製紙を現在の規模に育て上げた。また、1928年には長岡工業会を設立して産学官連携を推進し、1944年には新潟県商工経済会の会頭に就任した。1945年8月1日の長岡空襲で市長・鶴田義隆が殉職すると、その後任に推されて9月に第8代長岡市長に就任、長岡市の戦災復興に精力的に取り組んだ。1947年、参議院議員となって緑風会に所属。第3次吉田内閣第1次改造内閣では、郵政大臣兼電気通信大臣を務めた。また財団法人積雪研究会の会長となって、長岡市内に積雪科学館を作り、長岡市科学博物館の建設にも支援を惜しまなかった。1962年には藍綬褒章、旭日重光章を受章。その翌年に死去、享年76。死後、長岡市葬が営まれ、長岡市の名誉市民となった。

3. 拝殿脇の西脇順三郎撰文の蒼紫神社碑

(写真から文字起こし 春日)

正面銘文

蒼紫神社

凡そ二百余年前当山に蒼紫神社が造営され事代主命(俗にえびす神)と長岡牧野藩三代の英主忠辰公を祭る蒼紫神社の称号は長岡城内に御二方を御祭神として一社を造営したとき京都吉田家より事代主命の故事に因んで蒼紫霊神の神号を贈られたものである忠辰公が平素事代主命の神徳を仰ぎ崇敬特に篤かりし故に合わせ祭られた現社殿は九代忠精公により日光東照宮に模し明和六年(一七六九年)起工し十三年を費やして天明元年八月竣工し城内より遷座されたとき此の地を悠久山と命名された大正八年当社を中心として公園を造る議があり当社も進んで境内地二万三百六十八坪(六七、三三三平方メートル)を公園用として市に寄付し又令終会が五万余坪を寄付し今日の悠久山公園が出来たものである約二百年の星霜を経て損傷甚だしく造営物の大修理を要する時期に至った昭和三十八年四月役員総改選に当たり新人が大多数選出された役員会で大修理を決議し奉讃会を作り氏子を初め有志の方々の浄財をお願いし又公園を造る時当社と長岡市との間に結ばれたる覚書により今回の大修理の工事費に相当支出を申し入れた市は憲法違反の疑いもあるので金は支出できぬと断り続けたが遂に互譲して円満解決将来再び争いの起こらぬ様契約を更新した奉讃会の寄附金土地売却代等で総収入二千三百余万円を得て昭和三十八年より同四十六年まで九カ年の歳月を費し工事を施した主なるもの次の通り本殿玉垣改築拝殿修理拝殿前の敷石神選所移転三の鳥居改築表参道北参道の大修理社務所改新築宝物庫新築等二千万円余を要したこの長き九年の歳月にわたり時の責任役員高島博氏が一切を専任し粉骨砕身全精力を注ぎ工事に当り又一方市と大正八年の覚書更新に将来の神社維持等に万全の取極めをした此処に当社創立以来御造営物の修理完工を見たので記念として一碑を建て後世に残す

昭和四十六年十月 撰文者 西脇順三郎
額 明治神宮 宮司 伊達 巽 謹書

碑石全景

裏面 蒼紫神社奉讃会
宮司 永井康雄 代
魁峰 斎藤迪信 謹書

額



水沢梅吉の書、「悠久山のいしぶみの
スケッチ集」によれば、その大きさは
碑石の総高 305cm 幅 120cm
台座含め 総高 402cm 幅 372cm



悠久山公園の碑・モニュメントの中で、三指に入る巨大な記念碑

4. (1) 山本帯刀

撰文は三島毅(漢学者)

岡 山 義 君

旧長岡藩宰山本義路君碑 通信大臣海軍中将従二位勲一等子爵榎本武揚家類

長岡渡辺廉吉君持其旧藩山本君行状来請余撰其碑銘余因經緯其状序之曰君諱義路山本氏其先義純武田氏名臣山本晴行兄也仕徳川氏隸牧野康成屢有先登之功康成遂与禄宍千参百石為藩宰世襲至勘右衛門好學嗜武更張藩政為幕老樂翁公所知屢執謁建策多所暗輔云勘右衛門五世孫即君也君初稱堅三郎実同藩安田渡子渡以勘右衛門孫出嗣安田氏妻其家女生君君甫八歳会山本氏無嗣藩主命嗣之更稱帶刀襲先職君天資英敏高邁音吐如鐘言論尤明晰幼好讀書二行並下稱神童長學武術槍刀弓馬莫所不通平居無事弄文墨以娛明治戊辰 官軍之入越後也君疑其矯 勅勸藩主拒之乃以大隊長督戰百敗不撓及長岡城再陷猶逃会津謀恢復轉戰至飯寺村会朝霧晦冥誤陷 官軍重困中遂囚陣中 官軍愛其胆略勸降君憤然勵声曰吾聞藩主命戰未聞命降抗論不屈遂与侍臣豹吉同斬君年二十四豹吉二十七豹吉幼侍君為人温篤忠実君之學文武於藩校也未嘗不隨行同演故其業亦並進君敬之不敢臣視情如兄弟終同死亦不偶然豹吉渡辺氏実廉吉君兄也君亡後藩主出降 朝廷以其罪出君謀命絶其祀免藩主其後 恩赦再興家君妻山本氏女生二女長曰鈞治次曰鈞治親戚相議以鈞治承祀於是廉吉君等故旧相謀建碑于長岡城墟紀君事其主之忠烈并表朝廷之特恩銘曰

名門不虛 果出名士 允文允武 尽忠所仕 桀狗吠堯 其心何恥
天恩寬恕 父母之比 順逆不問 一視如子 名門奕奕 永存其祀

明治二十一年七月

大審院檢事従五位三島毅撰
内閣書記官正五位勲四等巖谷修書

井龜泉刻

詳細は
樺澤幸子 悠久山の「山本帯刀の碑」、長岡郷土史、第52号(2015) p88-97

4. (2) 三島億二郎の碑の碑文

長岡市立阪之上小学校、「わたしたちの悠久山」第四版 より、
三島君碑、碑文

三島君碑

正三位勲三等貴族院議員子爵 牧野忠篤篆額

三島翁、初メ鋭次郎ト稱シ、億二郎ト更メ、古狂又三洲ト號ス。本姓伊丹氏、出テテ川島氏ヲ嗣ゲ、後三島ト改ム。世世長岡藩ニ仕フ。資性謹厚和平、義ヲ重ンジテ堅忍、稍長ジテ文武兩ナガラ通スル所アリ。河井繼之助、小林虎三郎、鶴殿團次郎等、當時ノ俊秀ハ皆其交友ナリ。二十五歳、野口氏ヲ娶ル。此歳江戸ニ勤仕シ、古賀茶溪、佐久間象山等名流ノ門ヲ叩キ、大ニ智見ヲ弘ム。嘉永癸丑、米艦渡來シ人心洶洶タルヤ、翁藩命ヲ受ケ、馳セテ浦賀ニ抵リ、其形情ヲ視察シ、次デ時務ニ就テ建言スル所アリシガ有司ノ忌諱ニ觸レ、諷ヲ獲テ歸藩ス。是ヨリ意ヲ藩政ニ斷チ、學舎ヲ邸内ニ設ケテ子弟ヲ教育ス。既ニシテ戊辰ノ役起ルニ及ビ、藩宰河井繼之助ヲ助ケ兵馬ノ間ニ馳驅スルコト殆ト半歳、事志ト違ヒ城市兵駈ニ罹リ、君臣流離士民四散ス。明治政府新ニ成ルヤ、翁擢ンデラレテ長岡藩大參事トナリ、此慘狀ヲ賭テ傷心痛恨ニ堪ヘズ、渾身誠ヲ效シテ主家ノ再興士族授産ノ途ヲ講ズ。明治三年藩主ニ説キ北越ノ諸藩ニ先ンジテ藩籍奉還ノ義ヲ奏ス。廢藩置縣ノ後、徵サレテ柏崎縣大參事トナリ、後又大區長古志郡長トナル。然モ官仕ハ其志ニ非ズ。幾モナク皆之ヲ辭シ、専ラ力ヲ長岡ノ復興ニ用フ。國漢學校、長岡中學校、長岡社、長岡病院、女紅場、六十九銀行等皆翁ノ創設若クハ參劃セル所ナリ。而シテ翁ノ能ク是等事業ヲ成就セルハ、朝野ノ精神先生ガ翁ノ為人ヲ推重シ、常ニ援助ヲ惜マザリシニ由ル。翁又北海道拓殖ノ志ヲ懷キ、十九年北越殖民社ヲ起シ、老軀ヲ提ケテ寒地ヲ跋涉シ、移民ノ為メ畫策スル所多シ。二十三年、帝國議會ノ開カルルヤ、衆議院議員ニ推サレシモ固辭シテ受ケズ。問アレバ讀書釣魚以テ自ラ娛ム。然レトモ郷黨ノ輿望益々其身ニ集ル。二十四年北海ノ瘴癘ニ中リ病篤シ。特旨ヲ以テ從六位ニ叙ス。後稍愈エシモ、二十五年三月二十五日、終ニ長岡ノ白邸ニ歿ス。年六十八。長岡ノ今日アル、實ニ翁ノ力ニシテ、翁ハ眞ニ長岡復興ノ恩人ト謂フベシ。爰ニ後進一萬一千五百餘名相謀リ、碑ヲ悠久山ニ建テテ、永ク其人格ヲ敬慕シ其事業ヲ記念ス。

昭和二年十月

後進 正四位勲二等貴族院議員 橋本圭三郎 撰
後進 正四位勲三等功四級工學博士 小山吉郎 書

4. (3) 長岡藩総督河井君碑 顕彰碑

これは明治二十三年八月に建立されたもので
 「舊知三間正弘、小松彰、三島億次郎等、朝野の有志と相謀り、
 一大豊碑を舊長岡城趾に建つ、(始めは長岡停車場附近の舊城
 御三階跡に建てられしも、今は悠久山に在り。)文は山田方谷の
 家塾に於て繼之助と同門の誼ありし三島毅の撰にして、篆額は當
 年西軍の參謀たりし黒田了介、(清隆)の筆に成る。」
 (『河井繼之助傳 復刻版』今泉鐸次郎、象山社)

現在、この碑は長岡の悠久山公園内にあり、その裏面には
 「本碑之建立盡力
 (手偏にカタカナのムの下に月の字)金者不少姑記
 其最者如左
 小松彰
 三間正弘
 大野右仲
 三島億次郎
 外山脩造
 武昌吉
 稻垣林四郎
 加藤一作」

と刻まれています。

ちなみに三間、三島、武、稻垣は元長岡藩士。
 外山は栃尾の庄屋の出身。
 小松は元信州松本藩士ですが、継さとも親交があった人(そして豊岡県で
 は右仲さんの上司でもあった方です)。
 加藤は現時点ではまだ調査しきれていないんですが、ここに名を連ねていると
 いうことは継さと浅からぬ仲の人物であることがうかがえる。

方谷は長岡市から「故長岡藩総督河井繼之助君碑」の碑文を依頼された時、
 碑文の辞退とともに、愛弟子の繼之助に
 「碑文(いしぶみ)に書くもはずかし死に後れ(山田方谷)」の句を贈った。

篆額は、戊辰戦争時の新政府軍参謀で、のちに内閣総理大臣も務めた黒田清隆
 である。

黒田は河井繼之助を高く評価し、北越戊辰の戦いでは長岡藩家老・河井繼之助
 に親書をもって降伏を勧めたが、戦いの混乱で手紙が届かなかったという。
 もしこの手紙が届いていたなら、長岡の歴史も違う道をいったかも。

5. 星野嘉保子碑の碑文

水沢梅市著、「悠久山のいしぶみのスケッチ集」より、
星野嘉保子碑の碑文

星野嘉保子女子ハ嘉永元年(1824)津原郡岩室村西越屋小川(現三郡州)長女ニ生レ
 六歳ニシテ夜間表ニ的医師星野宗仙ニ養ハレニテ八歳ニシテ未未夫タル人ヲ
 病歿ニ遭ヒ母子ハ一生獨身生活ヲ決心シ慶應三年(1827)養父ノ死後家計困難ニ陥リシト
 實中能ク衣食母ニ孝養長ヲ事カサル辰ノ亂ハ長岡ヲ焼スト化シ女史ノ家モ有ニ
 歸レ一時携町梅田具ニ寄寓シ去云ヲ以テ幸テノモ生計ヲ之ヲフル明治八年(1875)縣令永山
 盛輝氏ノ家庭教師ニ任ハル翌九年(1876)新潟女紅場設立女史ハ女工ノ教育ヲ命ゼレ在
 任中教師ノ模範トシテ度々縣ヨリ賞與サレ終ニ生徒總取締ニ舉ゲル今十二年(1879)
 任ヲ辭シ今十二年(1879)長岡小田所ニ芸館敷設總信習所設置セルヤ其ノ教授トナル
 今二十三年(1880)三月女自教育ノ要ヲ感レ阪上町ニ長岡女學校ヲ創立シ主トシテ教
 練ヲ教授シ合ヲ和漢古今ノ烈女伝ヲ講シテ精神ノ修養ニ勤ム今三十年(1887)不幸火
 災ニ罹リ翌年(1888)院町牧野子承討家別邸ヲ讓受ケ今三十二年(1889)十月不幸火
 ル當時長岡ニ夫ガ高等女學校ノ設ナラ爲ニ遠ヲヨリ入學スルモノトタテ益々其隆盛
 ラ見ル今三十四年(1891)傳教總善會ヲ起シ大ニ淨財ヲ取テ慈善事業ニ事カレ今三十七年
 十月新潟縣女子教育會副会頭ニ推薦スル新ニ嘉保子女子ハ一生ヲ長岡女學校
 ニ捧ケ縣下女子教育ノ爲ニ多大ノ力ヲ致サレタリレカ州治三十七年(1894)十一月十九日
 五十七歳ヲ以テ病歿スル大正二年(1912)六月生徒等女史ヲ追慕レシテ相計リテ銅
 像ヲ鑄テ悠久山上ニ建テ以テ其ノ徳ヲ永遠ニ記念ス
 昭和十一年(1936)九月二十三日 縣社本宮神社司從七位 永井桂治 謹誌

星野氏代子女ハ喜永元年源深原即若星村西赴越庄屋山麓ニ郡州ノ長女ニ生シ
 六歳ニシテ依嗣表ニ的医師星野宗仙ニ養ハレシテ未未夫死ハ人ヲ
 痛歎シ道ヒ母ハ一生獨身生活ヲ決心シ慶應三年養父ノ死後家計困難ニ陥リシ
 由申能ク養母ニ養育ヲ委ナルハ辰ノ亂ハ八日閉ラ焼ト化シ女史ノ家モ之有ニ
 歸シ一時構町梅田具ニ寓シ去云ヲ以テ母ヲモ生計ヲ立テラハ明治八年縣令永山
 盛輝氏ノ養育教師ニ在ハル翌九年紅場設立母史ハ女工ノ教育ヲ令セラレ在
 任中教師ノ模範トシテ度々縣ヨリ賞與サレ終ニ生徒總取締ニ榮テ元令十二年其ノ
 任ヲ辭シ令十二年長岡小田町ニ芸娼妓裁縫位習所設置セラレ其ノ教授トナル
 令二十三年三月廿日教育ノ要ヲ感レ阪之上町ニ長岡女子學校ヲ創立シ主トシテ裁
 縫ヲ教授シ合ヲ和漢古今ノ科ヲ任ラシテ精神ノ修養ニ功ハ令三十年十月不幸火
 災ニ罹リ翌年蕨光院町牧野子采則家別邸ヲ讓受ケ令三十二年校長宮澤成真ノ勸告
 ル當時長岡ニ未カク高等女子學校ノ設ナラ爲ニ遠ノヨリ入學スルモ、コトク益々其隆盛
 ヲ見ル令三十四年佛敎慈善會ヲ起シ大ニ淨財ヲ取テ慈善事業ニ盡カシ令三十七年
 十月新潟縣ニ教育ノ副令頭ニ推薦カレ斯レテ嘉保子女子ハ一生ヲ長岡女子校
 ニ捧リ縣下女子教育ノ殆メ大ニ力ヲ致サレタリカ州治三十七年十二月十九日
 五十七歳ヲ以テ病歿シ大正二年六月生徒等女子史ヲ追慕シテ之ニ相計リテ銅
 像ヲ鑄テ徳久山上ニ建テ以テ其ノ徳ヲ永遠ニ記念ス
 昭和十一年九月二十三日 縣社蒼峯神社司從七位永井桂治謹撰

星野嘉保子女史ハ嘉永元年西蒲原郡岩室村西船越庄屋小川寛三郎氏ノ長女ニ生レ六歳ニシテ長岡表二ノ町医師星野宗仙ニ養ハル二十八歳ニシテ未来ノ夫タル人ノ病没ニ遭ヒ女史ハ一生獨身ヲ決心シ慶應三年養父ノ死後家計困難ニ陥リシト雖も能ク養母ニ孝養ヲ盡サル戊辰ノ戦乱ハ長岡ヲ焼土ト化シ女史ノ家モ又烏有ニ帰シ一時横町梅田某ニ寄寓シ手藝ヲ以テ辛クモ生計ヲ立テラル家明治八年縣令永山成輝氏7の家庭教師ニ雇ハル翌九年新潟女紅場設立女史ハ女工ノ教育ヲ命セラレ在任中教師ノ模範トシテ度々縣ヨリ賞與サレ終ニ生徒總取締ニ舉ラル全十二年其ノ任ヲ辞シル全十三年長岡山田町ニ藝娼妓裁縫傳習所設置セラルルヤ其ノ教授トナル全二十二年三月女子教育ノ必要ヲ感シ阪之上町ニ長岡女學校ヲ創立シ主トシテ裁縫ヲ教授シ合テ和漢古今ノ烈女傳ヲ講シテ精神ノ修養ニ勤ム全三十年十月不幸火災ニ罹リ翌年觀光院町牧野子爵家別邸ヲ讓受ケ全三十三年校舍落成其ノ開校ヲ見ル當時長岡ニ未タ高等女學校ノ設ナク為ニ遠クヨリ入學スルモノ多ク益々其隆盛ヲ見ル全三十四年佛教慈善會ヲ起シ大ニ浄財ヲ求テ慈善事業ニ盡サル全三十七年十月新潟縣女子教育會副會頭ニ推薦サル斯克シテ嘉保子女史ハ一生ヲ長岡女學校ニ捧ケ縣下女子教育ノ為ニ多大ノ力ヲ致サレタリシカ明治三十七年十二月十九日五十七歳ヲ以テ病没サル大正十二年六月生徒等女史ヲ追懷シテ已マス相計リテ銅像ヲ鑄テ悠久山上ニ建テ以テ其ノ徳ヲ永遠ニ記念ス

昭和十一年九月二十三日縣社蒼紫神社社司從七位永井銈次郎撰書

6. 鵜殿団次郎の石碑

明治十二年仲夏建立の石碑

石碑の右半分が勝海舟、左半分が伊東祐亨(すけゆき)の撰文

鵜殿団次郎碑

右の勝海舟碑文は、残念ながら解読できず。
左の伊東祐亨碑文のみテキスト化しましたが、内容は理解できません。

右鵜殿春風先生碑文故海舟勝伯爵所撰且書也有志之士揖シコウ
建之於先生之郷 (一行)
里北越長岡祐亨学遊先生の門高校開学屈指期五十年今也及門
諸子後先凋落其存 (一行)
者寂寥如晨星及聞斯舉不勝欣躍因興男爵石黒君謀奉請小松宮
彰仁親王書篆額 (一行)
其上蓋勝伯爵平生大重先生ツク以有此撰加以皇親之題額先生於
是采蓋重矣(イ) (一行)
門人 元帥海軍大将従一位大勲位功一級伯爵伊東祐亨謹識

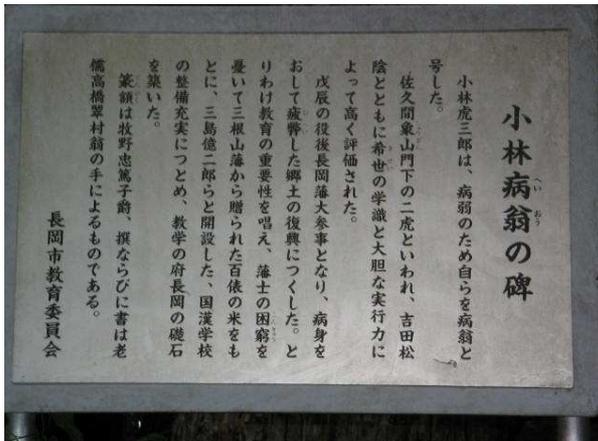
背面銘文

大正六年 五月建之
子爵 牧野忠篤 橋本喜三郎
大橋新太郎 澁谷善作
渡辺六松 山田又七
渡辺藤吉 福島甲子三
山口誠太郎 小川清之輔
川上佐太郎

勝海舟の碑文は、残念ながら解読できない。
AIで、くずし字を解読するシステムが開発されつつあるようだが、
一般市民も自分のパソコンで使用できるような時代は、いつ頃になるか。

7. 小林虎三郎の碑

篆額は牧野忠篤、撰文は高橋翠村(儒者)



8. 福島甲子三 悠久山 石碑



福島甲子三の企業者活動と地域・社会貢献活動

長岡大学教授 松本和明

福島甲子三は、1858(安政 5)年 12 月 27 日に、長岡藩士の鬼頭少山・寿の三男として長岡城下西神田町に生まれた。少山は致仕後の号であり、名は正路、通称は房五郎後に平四郎と称し、石高は 32(後に 37)石であった。

鬼頭熊次郎は少山の弟、甲子三の叔父にあたる。

少山は河井継之助から信頼され、北越戊辰戦争では新潟港で銃器や弾薬の調達にあたった。甲子三は母や兄妹と魚沼郡船山村へ避難し、龍源寺にて得度した。1869 年に長岡に戻った。千葉県庁および東京府庁での行政官としての経験を積んだのち、その間に面識を得た渋沢栄一および大橋新太郎の勧めを受け入れて東京瓦斯(現・東京ガス)に転じ、ビジネスのスキル・ノウハウを蓄積した。1910 年代には、長岡地域や新潟県の産業、さらに日本の石油業の発展を主導した宝田石油の経営再建を担った。

これとともに、渋沢の影響および指導を受けて、長岡地域内外で多種多様な地域・社会貢献活動(フィランソロピー)に生涯にわたり尽瘁した。

福島は、長岡地域のみならず東京さらには全国レベルで活躍して広く尊敬を集めた企業家ないし社会事業家であり、その活動と成果は大いに評価されるに値する。

令終橋の碑・左側面の銘文

栖吉川ヨリ中學校迄四百壹間

公園入口迄九百貳間

大正五年五月新開 令終會

悠久山公園道路

http://www.kome100.ne.jp/main/contents/cec/naga_data/nagaoka/rekisi/yukyu/4.htm

大正七年(1918)、牧野氏入封三百年を記念して、長尾開府三百年祭が行われた。

そのころ、六十歳以上の有志が「令終会」を組織し、悠久山公園のを行った。

福島甲子三は令終会の中心会員として、悠久山の自然公園化に尽力を惜しまなかった。

安政五年(1858)長岡藩士の家生まれ、実業・教育界で名を高め、昭和十五年(1940)没した。愛郷心が強く、戊辰戦争の辛酸から奮起した不撓不屈の長岡人であった。

9. 悠久山 県社蒼紫神社 灯籠風の石碑 (娛寿会の碑 ほか)

参道から二対の灯籠を過ぎたあと、県社蒼紫神社 灯籠風の石碑
昭和五年(1930年)に県社に昇格した記念に、同十年(1935年)に
娛寿会が建立。

「縣社蒼紫神社 正一位公爵徳川家達」の
文字は徳川家達が書いたもの。

台座の正面の銘に、娛寿会会員の氏名が刻されている。

會長 小村庄平 ～小村屋は薬問屋で、戊辰の役当時、山県ら
奇兵隊がここ神田小村屋を本陣としていた。 牧野忠成が寛永7年
(1630)に長岡に来たったとき、この尾張屋(当時、表町)で憩んだという。

常務幹事 今井要造

柴木直吉

幹事会計 難波又三郎 (難波鉄工 所)

平石量平 (平石商店、醤油屋ほか)

幹事 十名のなかに

大原石松 (大原鉄工)

顧問 多数 正面の1/3、左面、そして背面に刻されている。

子爵家達に続き、大橋新太郎、山田又七、

福島甲子三ら、錚々たる名前が並ぶ

小村屋の祖は尾張の豪族といわれ、足利時代の末期、戦に敗れて、
この地に隠れ住み、出身地名をとって尾張屋と屋号して、売薬業を
営んだ。元和4年(1618)、牧野忠成は長峰からこの地に移封されたが、
寛永7年(1630)に長岡に来たったとき、この尾張屋で憩んだ(やすんだ)
ともいわれ、このころからいまの表町三丁目に居を構えていた。
やがて町年寄り役をつとめ、代々はん御用をうけたまわり、家伝の
龍仙湯などを商った。

それから五代目の・・・次男を神田町に分家して、薬種業を営んだ。
本家では、後の時代、英庵が「後越薬草」を表わした学者でもあった。

～長岡の商家

碑文の徳川家達(いえさと(1863年8月24日 - 1940年6月5日))は、
徳川宗家の16代当主。

もとは田安德川家の7代当主で、静岡藩の初代藩主。幼名は亀之助
といった。号は静岳。位階、勲等、爵位は従一位大勲位公爵。

世間からは「十六代様」と呼ばれた。第4代から第8代までの貴族院議長、
ワシントン軍縮会議全権大使、1940年東京オリンピックの組織委員会の
委員長、第6代日本赤十字社社長、華族会館館長、学習院評議会議長、
日米協会会長などを歴任した。

特命全権大使、全権大使の位置づけ

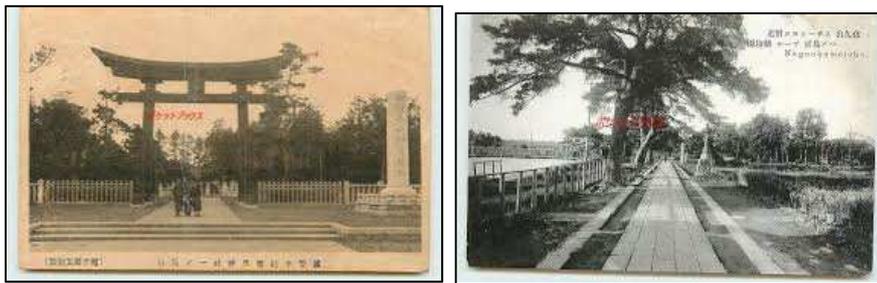
ワシントン軍縮会議(1921年11月12日 - 1922年2月6日)

特命全権大使については、派遣国は派遣する者について、接受国から合意を得なければならない。特命全権大使は、接受国の元首(chef d'Etat)に対し、派遣国の元首(日本国の場合は天皇)が派遣する。

昭和9年((1934年)のロンドン軍縮会議予備交渉に山本五十六が全権代表として出席しており、1935年建立に当たって、山本五十六との軍縮会議全権の縁で、公爵徳川家達に、依頼したのではないかと、推察する。(春日)

壱の鳥居

蒼紫神社を建立した第九代藩主牧野忠精が寛政十二年(1800年)に寄進、当時忠精は京都所司代で、大阪の平松喜右衛門義雅に材料を大阪から運ばせ造らせた。



柱には「寛政十二庚申年二月吉日
従四位下侍従為備前守源忠精朝臣」の銘。

10. 補足

石黒忠憲子爵

石黒 忠憲(いしぐろ ただのり、1845年 - 1941年)

明治時代の日本陸軍軍医、日本赤十字社社長。草創期の軍医制度を確立した。爵位は子爵。

長州閥のトップ山県有朋や薩摩閥のトップ大山巖、また児玉源太郎などと懇意で、その後も陸軍軍医部(後年、陸軍衛生部に改称)に隠然たる影響力をもった。

文学研究者には森鷗外の上官として、よく知られている(両者の確執が論じられることもある)。

大倉喜八郎とは古くから交遊があった。大倉商業学校(今の東京経済大学)の設立に参加し、理事兼督長(現在の理事長兼校長)をつとめた。

日比谷公園の開設に関わった。安寧健康上の設計を林学博士の本多静六から依頼され、洋風の公園となった。

父・平野順作良忠は幕府代官の手代。

武石弘三郎が作像。

武石弘三郎は、1909年帰国後。同郷(?)の石黒忠憲の知遇を得、その関係で松本順・石黒忠憲像や森鷗外像の制作を手がけた